

# 平成30年度(第69回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：19名 文部科学大臣新人賞：11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	とよたけ ろせ たゆう 豊竹 呂勢太夫	文楽太夫	ほんちようにじゅうしこう 「本朝廿四孝」ほかの成果
		ふじやま なおみ 藤山 直美	俳優	「おもろい女」の成果
	新人賞	あおい ゆう 蒼井 優	俳優	「アンチゴーヌ」ほかの成果
映画	大臣賞	くろさわ かずこ 黒澤 和子	映画衣裳デザイナー	「万引き家族」の成果
		つかもと しんや 塚本 晋也	映画監督・俳優	「斬、」の成果
	新人賞	やました のぶひろ 山下 敦弘	映画監督	「ハード・コア」の成果
音楽	大臣賞	きねや かつろう 杵屋 勝四郎	長唄唄方	「第8回杵屋勝四郎リサイタル」ほかの成果
		たかはし すいしゅう 高橋 翠秋	胡弓演奏家	こきゅう しおり 「胡弓の葉」ほかの成果
	新人賞	ふじくら だい 藤倉 大	作曲家	「藤倉大 個展」ほかの成果
舞踊	大臣賞	おの あやこ 小野 絢子	バレエダンサー	「眠れる森の美女」ほかの成果
		しのはら せいいち 篠原 聖一	舞踊家	「宿命」ほかの成果
	新人賞	いのうえ やすこ 井上 安寿子	日本舞踊家	ながなたやし 「長刀八島」ほかの成果
文学	大臣賞	やまお ゆうこ 山尾 悠子	作家	「飛ぶ孔雀」の成果
		よしだ しゅういち 吉田 修一	小説家	「国宝」の成果
	新人賞	たにさき ゆい 谷崎 由依	小説家	「鏡のなかのアジア」の成果
美術	大臣賞	おざわ つよし 小沢 剛	美術家	「不完全—パラレルな美術史」展ほかの成果
		ないとう れい 内藤 礼	美術家	「内藤 礼—明るい地上には あなたの姿が見える」展の成果
	新人賞	いしがみ じゅんや 石上 純也	建築家	ボタニカルガーデンピオトープ「水庭」の成果
放送	大臣賞	いとう じゅん 伊藤 純	プロデューサー	しんにほんふどき 「新日本風土記」の成果
	新人賞	のぎ あきこ 野木 亜紀子	脚本家	「アンナチュラル」の脚本
大衆芸能	大臣賞	しろうくいてつるべ 笑福亭 鶴瓶	落語家	「笑福亭鶴瓶落語会」ほかの成果
		たけうち まりや 竹内 まりや	シンガー・ソングライター	「souvenir the movie」ほかの成果
	新人賞	うただ ひかる 宇多田 ヒカル	シンガー・ソングライター	アルバム「初恋」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	さとう たく 佐藤 卓	グラフィックデザイナー	「デザインあ展 in TOKYO」ほかの成果
	新人賞	すがわら なおき 菅原 直樹	俳優・介護福祉士	「よみちにひはくれない」ほかの成果
評論等	大臣賞	おかさき けんじろう 岡崎 乾二郎	造形作家・批評家	「抽象の力 近代芸術の解析」の成果
		ふるいど ひでお 古井戸 秀夫	東京大学名誉教授	つるやなんぼく 「評伝 鶴屋南北」の成果
	新人賞	すがわら まゆみ 菅原 真弓	大阪市立大学教授	つきおかよしとしでん 「月岡芳年伝 幕末明治のはざまに」の成果
メディア芸術	大臣賞	あらかし ひろひこ 荒木 飛呂彦	漫画家	「荒木飛呂彦原画展 JOJO 冒険の波紋」ほかの成果
	新人賞	はずぬま しゅうた 蓮沼 執太	音楽家	「蓮沼執太: からいんぐ ～ ing」展の成果

※敬称略・部門内50音順・受賞者名の下線は女性

平成30年度(第69回)芸術選奨  
文部科学大臣賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	豊竹 呂勢太夫	豊竹呂勢太夫氏は、文楽の中で最も充実している太夫の一人である。平成30年は「本朝廿四孝(ほんちょうにじゅうしこう)」勘助住家(かんすけすみか)の段の後半を語り、その実力を発揮した(4月国立文楽劇場、5月国立劇場小劇場)。自ら目をえぐり武田家の軍師、山本勘助となる豪胆な横蔵、風格ある弟・慈悲蔵(じひぞう)実は直江山城之助、深謀の母らを時代物のスケールの大きな語りで表現。さらに、「傾城恋飛脚(けいせいこいびきやく)」など世話物では、美声で情を豊かに表現。「桂川連理柵(かつらがわれんりのしがらみ)」で文楽伝統のチャリ場(滑稽な場)の面白さを出し、芸の幅広さも示した。
演劇	藤山 直美	藤山直美氏が、名作舞台「おもろい女」に新たな命を吹き込んだ。演じたミス・ワカナは、戦前、戦後に人気だった上方の天才漫才師。氏は、漫才の場面などで笑いを誘う一方で、芸のためなら妥協も許さない厳しさ、人気の陰で抱える孤独と悲しみ、道半ばで命を落とすラストまで、初演より更に磨きが掛かった凄(すご)みさえ感じさせる演技で、ミス・ワカナの人物像を鮮明に造形した。正に、氏の「おもろい女」を作り上げた。
映画	黒澤 和子	黒澤和子氏は、衣裳デザイナーとして、時代劇から現代劇まで様々なジャンルの映画の登場人物にリアリティを与え、平成30年の大河ドラマ「西郷どん」でも映画の衣裳デザインの力を大いに発揮した。国内外で評価の高かった「万引き家族」における衣裳は決して豪奢(ごうしゃ)なものではないが、疑似家族である登場人物各々のキャラクターに命を吹き込み、彼らを魅力ある人物として見せることに貢献した。日本の映画衣裳デザインを今後も牽引(けんいん)する存在であることに疑いはない。
映画	塚本 晋也	塚本晋也氏は、一貫して脚本、美術、撮影、編集、出演を兼ねた映画作りをしているが、制約の多い時代劇の「斬」においてもそのスタイルを貫き、映画を志す者に刺激を与え続けている。一方で、日本映画史上の時代劇に敬意を払いつつ、「人を斬る」ことの意味を通じ、今までの時代劇には見られない「生と死」を巡る哲学的な考察に踏み込んでいる。それは正に現代社会を撃つことにほかならず、時代を超えた塚本映画の到達点となった。
音楽	杵屋 勝四郎	杵屋勝四郎氏は、長唄唄方のトップランナーとして、歌舞伎をはじめ、舞踊、演奏の各領域で確かな地歩を固めているが、特に還暦を迎えた平成30年は、突出した活躍が記憶に残る年となった。リサイタルでの「問答入り勸進帳(かんじんちょう)」ほか、「綱館(つなやかた)」「百千鳥娘道成寺(ももちどりむすめどうじょう)」等では、曲の位に応じて剛柔のバランスを巧みにコントロールし、豊潤な世界を描き出した。役者や舞踊家の身体表現を最大限に引き出し、一体化させる演奏もまた、氏ならではのものである。
音楽	高橋 翠秋	高橋翠秋氏は、胡弓の伝統の継承とともに、新たな可能性を開く活動も積み重ねている。平成30年は、古典曲と現代曲、独奏と合奏を含む意欲的なプログラム「胡弓の栞(しおり)」によって、胡弓の魅力余すところなく披露した。活動のジャンルは、地歌箏曲、歌舞伎、舞踊などの多岐に及び、演奏、創作、役者を含む後進への指導も行っている。繊細で多彩な音色と豊かな表現力を追求する長年の活動は、胡弓の普及と発展に大きく貢献しており、評価に値する。

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	小野 絢子	小野絢子氏は、新国立劇場バレエ団のプリンシパルであり、10年近く名実共に同団のトップダンサーである。バレエの美を体現する端正で精確な技量は、若い頃から高い評価を受けてきた。平成30年は、古典バレエを代表する「眠れる森の美女」「白鳥の湖」「くるみ割り人形」の3作品に主演して貫禄ある美しい踊りを披露し、新制作「不思議の国のアリス」でも演技力を発揮して上演を成功に導いた。年間を通じ、日本バレエの頂点に位置するダンサーとして存在感を発揮し続けたことは賞賛に値する。
舞踊	篠原 聖一	篠原聖一氏は、首都圏のみならず各地のバレエ団、スタジオで作品を精力的に発表、幅広い世代のダンサーたちに上質な作品へ出演する機会を与え、日本バレエ界に多大な影響を与えてきた。平成30年の作品「宿命」では、時代のうねりの中で生きる人間の姿を緻密な構成でドラマティックに描き出し、ダンス・音楽・美術からなる総合芸術としてのバレエの本質を捉えた。とりわけ時代が大きく転換していくときのエネルギーを描き出した群舞は圧巻であった。特定のカンパニーではなく、本作のために集結したダンサー40数名により、スケールの大きな舞台を作り上げたことも賞賛に値する。
文学	山尾 悠子	いずことも知れぬ土地に起こる、ありえない事柄が、極当たり前の出来事であるかのように綴(つづ)られていく。虚構の時空のただ中に投げ込まれた読者は、しばし方向感覚を失いかねない。だが、その驚きはたちまち、確かな文学的体験に転じていく。山尾悠子氏の静謐(せいひつ)にして精緻な文章が、奔放な想像をしっかりと支え、「ことば」のみによって全てを生み出そうとする潔い在り方が深い愉悦を生む。鏡花以来の日本幻想文学の水脈を受け継ぐ傑作の誕生だ。
文学	吉田 修一	「国宝」は、作家生活20周年を迎えた吉田修一氏が歌舞伎の世界に挑んだ大作である。任侠(にんきょう)の家に生まれた少年は関西歌舞伎の名門の芸養子となり、人気の女形として芸道を邁進(まいしん)してゆく。高度経済成長期から現在への世相を背景にし、さらに、「菅原伝授手習鑑(すがわらでんじゆてならいかみ)」「隅田川」「阿古屋(あこや)」などの演目を絶妙に反映させながらドラマが展開される。「ございます」「おりました」といった柔軟な語り口も豊かな物語性を醸し出している。
美術	小沢 剛	小沢剛氏は、1980年代末以降、参加型アートの先駆的な活動で注目され、既存の歴史観や制度、とりわけ日本の近代美術史や教育制度に対する批判的な視点をユーモラスに作品化してきた。近年では、広く世界、中でもアジアにおける日本の歴史的立ち位置を再検証しており、千葉市美術館の「不完全-パラレルな美術史」展や東京藝術大学陳列館で見た「また帰って来たペインターF」はその活動が凝縮され、かつ発展した秀逸な展示であった。国際展への参加歴も極めて多く、今後の成熟した活動が更に期待される。
美術	内藤 礼	内藤礼氏の水戸芸術館での展覧会「明るい地上には あなたの姿が見える」は、氏にとって過去最大規模の個展となった。ギャラリー全体が一つのインスタレーションとなり、天井から吊(つる)された糸やビーズ、絵画、「ひと」形の小さな木彫を繊細に配置し、自然光のみで見せた。優美な光に満たされた静謐(せいひつ)な空間の中で、自らの存在と向き合う時間を観客は享受したことだろう。ひそやかではあるが、強靱(きょうじん)な作品は、「地上に存在することは、それ自体、祝福であるのか」という作家の根源的なテーマを追究するものであり、その高い完成度と相まって、際立った達成を示した。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	伊藤 純	伊藤純氏は、長年、歴史、文化、自然科学など、多岐にわたるテーマで数多くの秀作ドキュメンタリーを制作。氏のライフワークとも言える「新日本風土記」は、平成30年で250回の放送に及ぶ。美しい映像でつづる日本各地の原風景、そこに暮らす人々の姿、今も伝わる風習は、改めて日本人としての誇りを実感させられる。平成30年は、明治維新から150年に当たり、「明治維新への旅」や「古事記への旅」など、従来の地域ものにとどまらず、企画の幅も広がった。番組の新しい可能性を期待させた。
大衆芸能	笑福亭 鶴瓶	テレビにおける巧みな話術、映画・ドラマでの個性を全面に出した演技でも異彩を放つ笑福亭鶴瓶氏らしいトーク「鶴瓶噺(つるべばなし)」で会場との一体感を作り、創作の「山名屋浦里(やまなやうらざと)」、人情までも大阪風に描き直した「妾馬(めかうま)」、講談ネタ「徂徠豆腐(そらいどうふ)」などに、笑福亭の家の芸である古典落語を交えるなどした構成で、全国9か所15公演を開催した。また、他の落語会へも積極的に出演し、笑いだけにとどまらない人情味あふれる落語の世界へ誘った。
大衆芸能	竹内 まりや	平成30年にデビュー40周年を迎えた竹内まりや氏は、「souvenir the movie ～MARIYA TAKEUCHI Theater Live～」において自らの足跡を振り返ると同時に、これまで3度実施してきた公演記録から代表作を映像化した。親しみやすいメロディーと普遍性に富んだ歌詞が物語る作詞、作曲家としての才能や、その実績、表現豊かで説得力あふれる歌手として存在感を印象付けるとともに、今後の活動に対する意欲的な姿勢をうかがわせるものだった。
芸術振興	佐藤 卓	人間は、石器時代以降、多くの「モノ」を人間の行動や感情の欲求に応じて生み出してきた。そして、その「モノ」を使い、生活に取り込むことにより、自身の思考や価値観をも変化させてきた。現代の私たちの生活の中に大きく入り込んできている情報の道具は、他者に対する意識、感情をも急激に変化させてきている。そのような激変するこの時代に人間の根本的な想像する力はどこにあるのか、それは一体何なのかを佐藤卓氏は追い求め続けている。「モノ」に支配される前に「モノ」を生み出す原理を見失わない自分たちであるための活動は、未来にとってとても大切な示唆を提示している。
評論等	岡崎 乾二郎	20世紀前半の抽象芸術を対象に、既存の美術史的な「様式」や「流派」といった後付けの範疇(はんちゆう)によって定義されるのではない、芸術家の制作現場に働いていた「技術と方法の特異性」を生み出し、その特異な方法論を「発想、選択し、統御」するとき構成される思想に注目した岡崎乾二郎氏は、それを「設計思想」と呼ぶ。氏の意欲作「抽象の力」は、抽象芸術をこの「設計思想」から捉え直すことによって、今まで語られなかった美術史・美術批評への接近を試みようとする果敢な挑戦であり、その優れた成果である。
評論等	古井戸 秀夫	歌舞伎研究を長年重ねてきた古井戸秀夫氏の集大成である。狂言作者の活動の復元は、文学と異なり、上演ごとに変化する台本を手掛かりとするほかなく、大きな困難を抱える。まして、映像記録のない時代の舞台芸術である。氏は、鶴屋南北の台本を徹底的に読み込むことでこの難題に挑み、歌舞伎を中心に展開する江戸の文芸世界を見事に描き出した。加えて、現代では演じられなくなった歌舞伎や舞踊の復活に精力的に取り組んできたことも評価に価する。

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	荒木 飛呂彦	<p>いつの時代にも、芸術が社会に伝えてくれるのは「異を以って尊しとなす」ことである。私は私であり、決して何か他の者と同じと見なすことはできない。荒木飛呂彦氏が、30年にわたって描き続けてきた「ジョジョの奇妙な冒険」を通して感じられるのは、そうした個の大切さと、違いを乗り越えて互いに尊重する姿勢である。平成30年に東京と大阪で開催された大規模な原画展では、ジャンルやメディアの違いを超えた表現者としての普遍性を、広く社会に提示、共有した。</p>

平成30年度(第69回)芸術選奨  
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	蒼井 優	蒼井優氏は、平成30年の二つの舞台で女優の幅を一段と広げた。「アンチゴーヌ」(ジャン・アヌイ作)の氏は、孤独な少女から、「狂気」を体現する女性へ一足飛びに成長する。王クレオンとの苛烈(かれつ)な対決の場の、一歩も引かぬ彼女の姿には凄(すご)みさえ感じられた。また、恋愛と階級社会を巧みにリンクさせた「スカイライト」(デイヴィッド・ヘア作)では、自立の誇りと孤立の痛みに揺れる現代女性の心の襞(ひだ)を丁寧に、また鮮やかに浮かび上がらせた。
映画	山下 敦弘	山下敦弘氏は、「どんてん生活」「ばかのハコ船」等、初期の作品から、既に社会とも身近な世界ともうまくみ合わずに生きる人間を主人公に、新しいリアリズムの地平を開き、注目されてきた。平成30年には、1990年代に連載された漫画を原作とする「ハード・コア」で、初期以来のテーマを痛快な娯楽性とともに出す新境地に進んだ。氏のますますの活躍が期待される。
音楽	藤倉 大	演奏家との密接なコラボレーションを、対面で、あるいはネットを通じて行い、一作一作を丹念に練り上げながら、多彩で多作な創作活動を続けている藤倉大氏は、日本にとどまらないグローバルな領域で現代音楽の新たな聴衆を獲得している稀有(けう)の存在である。日本初演されたオペラ「ソラリス」こそ評価が分かれたが、着想に富み、斬新な響きを湛(たた)え、技術的にも高度ながら、過度に格式高くない芸術音楽の在り方は、個展での作品群全てで顕著に示された。
舞踊	井上 安寿子	井上安寿子氏は、京舞井上流の後継者として、曾祖母の井上愛子氏(四世井上八千代)、母の五世井上八千代氏の薫陶(くんとう)を受け順調に成長。清新さと、この世代では卓越したテクニックで早くから頭角を現していた。流儀の代表曲「長刀八島(なぎなたやしま)」では力強さを内に秘め、迫力と緊張感のある舞台を創造。平成25年から継続している自主公演「葉々(ようよう)の会」でも流儀で大切に扱われている「もさ順禮(じゅんれい)」を丁寧かつダイナミックに、大らかに勤め、著しい進境を示した。将来の日本舞踊界のリーダーの一人となる大器を感じさせる。
文学	谷崎 由依	アジアの異境を旅する語り手は、その土地の魅力に感応しながらも、母国語や自意識の自明性に揺さぶりを掛けられる。現実とは交わらないはずの平行世界に迷い込んだ者が味わうであろう浮遊感がリアルに再現されてもいる。谷崎由依氏の紀行文であり、ファンタジーでもある独特のスタイルは、読む麻薬のような効能を読者にもたすが、それ以上に、悪夢としての現実とは別の平行世界を出現させる小説家本来の仕事の思い出させてくれる。氏の今後の活躍が期待される。
美術	石上 純也	森の中の一風景に見える「水庭」は、極めて人工的な作品である。もともとここは何もない平地だった。全てに先立って、石上純也氏のイメージに立ち現れたもの、それを建築的な手法を駆使して、誰も見たことのない風景へと導いた。こんな風景は自然の中には存在しない。だから、少しでも人が手を緩めると崩壊してしまうフィクションであり、その蜻蛉(かげろう)のような儚(はかな)さが人を引き付ける。危うい姿勢でつま先立ちをして語り掛ける静寂。自然とは何か。人とは何か。それは、精神の深奥に語り掛ける美しい逆説である。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	野木 亜紀子	野木亜紀子氏は、ドラマ「アンナチュラル」において、架空の「不自然死究明研究所(UDI)」を舞台に、不条理な死に立ち向かう法医解剖医を主人公としながら、単なる謎解きのサスペンスドラマとは一線を画し、遺(のこ)された者たちがいかに生き続けるかを問い掛けた。自殺系サイトや長時間労働、いじめ等の今日的な問題を織り交ぜつつ、解剖医たち自身が「生きるとは何か」という根源的な問いに向き合うプロセスを、卓抜な構成力により描き切った氏の手腕が高く評価された。
大衆芸能	宇多田 ヒカル	宇多田ヒカル氏は、驚異的なベスト・セラーを記録したデビュー作の「First Love」以来、作詞、作曲だけでなく、編曲、制作にも意欲的に取り組んできた。アルバム「初恋」では、音楽面での創作意欲とともに、前作の「Fantôme」以来の日本語による内省表現や現代社会への視線を反映した歌詞世界、歌唱においても独自の個性を発揮した。また、制作者としてもアーティストのプロデュースを手掛けて成果を収めており、氏の今後の活躍を大いに期待させる。
芸術振興	菅原 直樹	菅原直樹氏は、「老人介護の現場に演劇の知恵を、演劇の現場に老人介護の深みを」という理念の下、高齢者社会の課題に演劇で取り組む演出家、俳優、劇作家、介護福祉士である。演劇と介護という異なる領域での専門的経験を生かした研究と実践から独自の手法を開発し、両分野で成果を挙げている。介護者の負担軽減や高齢者の生きがいに繋がるワークショップや、「よみちにひはくれない」などの介護の問題を取り扱った演劇作品の創作は、「創造性」により問題を解決する方法として多方面から高い関心を集めており、新領域の開拓及び今後の高い可能性を期待させる。
評論等	菅原 真弓	菅原真弓氏の「月岡芳年伝 幕末明治のはざまに」は、血塗られた凄惨(せいさん)な表現ばかりが目立され、偏ったイメージで語られてきた幕末明治期の浮世絵師、月岡芳年を、手堅い実証的な美術史研究の沃野(よくや)に放ち、変転する時代の諸相をリアルに映した浮世の画家であることを明らかにした労作である。本書に凝集する丁寧な考察の加えられた江戸から明治の画像や文献類は、芳年研究はもちろん、世相やメディア研究など広い分野においても今後、大いに参照されていくことだろう。
メディア芸術	蓮沼 執太	蓮沼執太氏は、抽象的な電子音楽やポップミュージックで知られ、音と音楽を介して文学、舞踏、映画、ファッションなど多くのジャンルで協働する。近年、氏は、年に1、2回の個展を開いており、平成30年の個展「～ ing(からいんぐ)」は、「～」は関係性を、「ing」は現在進行形を意味し、観客が音を発見する参加型インスタレーションを中心に、フィールドワークを駆使して、音の繋(つな)がりや差異を都市や個人の現象としてリアルかつ詩的に表現した。複雑な現代をポジティブに変革期と捉えて実践する、期待すべきマルチなクリエイターである。

平成30年度(第69回)芸術選奨  
選考経過

## 平成30年度(第69回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
演劇	<p>演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として16名の推薦があり、伝統芸能から現代演劇の劇作家、演出家、俳優まで幅広い候補が並んだ。第一次選考審査会では活発な議論が交わされ、その結果、文部科学大臣賞は伝統芸能分野2名を含む5名に、文部科学大臣新人賞は伝統芸能分野2名を含む6名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績について様々な角度から議論が重ねられた。まず、文部科学大臣賞では、「本朝廿四孝(ほんちょうにじゅうしこう)」勘助住家(かんすけすみか)の段でスケールの大きな時代物の世界を存分に語りその力量を示すなど、充実した活躍を見せた文楽太夫の豊竹呂勢太夫氏を選出。現代演劇からは、病気による療養から復帰した舞台「おもろい女」で、以前にも劣らぬ演技の力量、役者としての存在感を発揮した藤山直美氏を選出した。文部科学大臣新人賞は、その実績と将来性をどのように評価するかの討議となり、2名の候補に絞り込まれ長い白熱の論議が交わされた。その結果、「アンチゴーヌ」で凄(すご)みある演技を見せるなど舞台俳優としての著しい成長が評価された蒼井優氏を選定した。</p>
映画	<p>映画部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として10名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会では、各賞に挙げられた全ての候補者について、選考審査員が自ら推薦する候補者の業績・推薦理由を述べ、推薦委員の挙げる候補者についても、その業績及び推薦理由を確認した。それらに基づいて、選考審査員の間で活発な議論が繰り広げられた結果、文部科学大臣賞は5名に、文部科学大臣新人賞は7名の候補者に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績と評価の対象となった各作品について、更に多様な視点からの議論が行われた。その結果、文部科学大臣賞には、長年にわたり映画衣裳の分野で優れた実績を上げ、とりわけ「万引き家族」での成果が秀逸であると認められる衣裳デザイナーの黒澤和子氏と、常に高度な作家性を保ちながら独自の映画製作を続けて世界にもその名を知られ、今回は初の時代劇「斬」に挑戦した映画監督の塚本晋也氏を選出した。文部科学大臣新人賞には、「ハード・コア」で新境地を開いた映画監督の山下敦弘氏を選出した。</p>
音楽	<p>音楽部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会では、それぞれの候補者について、提出された業績や推薦理由等を踏まえ、選考審査員の推薦候補については説明を聞き、推薦委員の候補に関しては推薦書類を精査した上で慎重な議論を行い、文部科学大臣賞は6名に、文部科学大臣新人賞は3名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞候補及び文部科学大臣新人賞候補について、第一次選考審査会後に、各選考委員が確認した情報も加えて、更に検討を重ね、白熱した議論を経て、それぞれの受賞者を決定した。その結果、文部科学大臣賞に「第8回杵屋勝四郎リサイタル」ほかの成果により杵屋勝四郎氏、及び「胡弓の栞」ほかの成果により高橋翠秋氏を選定し、文部科学大臣新人賞には「藤倉大 個展」ほかの成果により藤倉大氏を選定した。いずれも平成30年の卓越した成果が高い評価を受けたもので、最終的に選考委員全員の満場一致による選定である。</p>
舞踊	<p>舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は5名に、文部科学大臣新人賞は4名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、活発な議論が交わされた結果、文部科学大臣賞は、洋舞系分野の3名に集約された。その中で、小野絢子氏の「眠れる森の美女」をはじめとする年間を通じての舞台成果、また、篠原聖一氏の「宿命」をはじめとする国内各地における活動が、選考審査員の多数から高い評価を得て、平成30年は、バレエ界で活躍する2氏の受賞となった。また、文部科学大臣新人賞には、井上安寿子氏が、国立文楽劇場主催公演における地歌(じうた)「長刀八島(なぎなたやしま)」と自身の会の「もさ順禮(じゅんれい)」ほかの成果において評価する意見が多く集まり選考され、今後一層の活躍に期待する声も多く寄せられた。</p>

## 平成30年度(第69回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として14名の推薦があった。第一次選考審査会において慎重審議の結果、文部科学大臣賞は5名(作家・小説家4名、歌人1名)、文部科学大臣新人賞は7名(作家・小説家4名、歌人・俳人・詩人各1名)に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、まず文部科学大臣賞候補者5名の、今回審査対象となった作品について活発な議論が行われ、「火が燃えにくくなった世界」という綺想(きそう)を出発点に据え、緻密な非現実的イメージを次々に繰り出して読者を幻惑してやまない山尾悠子氏の「飛ぶ孔雀」、及び戦後の激動期を背景に、歌舞伎と任侠(にんきょう)という二つの世界のはざまに立つ美貌の主人公の運命を興趣(きょうしゅ)豊かに語りきった吉田修一氏の「国宝」の2編の長編小説への贈賞がふさわしいという結論を得た。続いて、文部科学大臣新人賞候補者7名についての審議に移り、ここでも白熱した議論が展開された。その結果、アジアの様々な土地をモチーフとした幻想譚(たん)を、音感豊かな文体で語った谷崎由依氏の短編小説集「鏡のなかのアジア」への贈賞が決まった。</p>
美術	<p>美術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として17名、文部科学大臣新人賞候補者として18名の推薦があった。第一次選考審査会では、全ての候補者について総合的に検討を行い、文部科学大臣賞は6名に、文部科学大臣賞新人賞は5名に候補者が絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、美術部門の多様性や賞の性格にも意を払いながら、更に議論を重ね、贈賞を決定した。文部科学大臣賞の両氏は、いずれも内外で実績を積み重ねてきた現代美術作家で、それぞれ公立美術館で開催した集大成的な個展を主な対象とした。内藤礼氏の過去最大規模の個展は、「地上にあることは祝福であるか」というテーマを、自然光のみによる静謐(せいひつ)な展示が浮かび上がらせていた。小沢剛氏の個展は、近代日本美術史という作家本来の主題に対し、アカデミックな美術教育を素材に、大胆かつユーモラスに切り込んだものであった。また、文部科学大臣新人賞の石上純也氏は、アートとの中間領域に建築の極限を追求してきた作家であり、湿潤な日本の自然を見事に表象しながら、一方で、自然には存在しえない景観を現出させる受賞作は、氏の代表作となるべきものと判断した。</p>
放送	<p>放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として16名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会では、双方に推薦された2名をどう扱うかも含め、予定の時間を超過するほどの白熱した論議が繰り広げられた。その結果、文部科学大臣賞は9名に、文部科学大臣新人賞は5名に候補者が絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、長時間の議論を経て、テレビプロデューサーの伊藤純氏が文部科学大臣賞に選考された。氏は、ディレクター時代に戦争などをテーマにした優れたドキュメンタリーを作り、プロデューサーに転じてからも第一線で番組を作り続けている。中でも、平成23年に始まった「新日本風土記」は全国各地の伝統文化や歴史的風土、人々の営み、暮らしを丁寧に記録し、「平成版の新日本紀行」と高く評価された。また、ドラマまで手がける多彩な活躍ぶりも賞にふさわしいと判断した。文部科学大臣新人賞は満場一致で、連続ドラマ「アンナチュラル」の脚本を書いた野木亜紀子氏に決まった。社会派エンターテインメント作品の新しい担い手として、氏の今後の活躍が大いに期待される。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として漫談家、落語家、浪曲師、歌手など12名、文部科学大臣新人賞候補者として歌手、漫才師、落語家、講談師、タレント、作編曲者など12名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は7名に、文部科学大臣新人賞は3名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞の選考において、シンガー・ソングライターの竹内まりや氏の映画「souvenir the movie～MARIYA TAKEUCHI Theater Live～」への評価が高く、本審査会をリードした。その中で、映画で描かれているライブが過去の素材であることが平成30年の活躍に合致するかという問題提起がなされたが、CDのリリースや、40年にわたり第一線で活躍し続ける氏の功績から、受賞にふさわしいとの意見に集約された。演芸関係では、本業以外にも俳優、タレントとして国民的人気の落語家、笑福亭鶴瓶氏の落語会が評価され、大多数の評価を獲得した。また、文部科学大臣新人賞には、アルバム「初恋」などの成果で、シンガー・ソングライターの宇多田ヒカル氏のサウンドメーカーとしての力量が高く評価され選出された。</p>

## 平成30年度(第69回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	<p>芸術振興部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として7名が推薦された。審査においては、表現領域にこだわることなく芸術への認識、理解、関心をより社会に広めていくこと、そして振興していく中でも芸術の本来の理念を見失うことなく、かつ経年することにより付きまってしまう先入観を解体し、新たな道を切り開いていく活動をしている候補者に注目した。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は4名に、文部科学大臣新人賞は4名に候補者が絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、個人としての主観的な視点と社会の中での客観的な視点の双方を持ち得るとの観点から、慎重に検討を重ねた結果、文部科学大臣賞には「デザインあ展 in TOKYO」ほかの成果において、デザインをベースとした幼児教育や音楽・映像への広がりのある取組を行っている佐藤卓氏が選出された。また、文部科学大臣新人賞には、「よみちにひはくれない」ほかの成果において、演劇と介護という異なる領域での専門的経験を生かした研究と実践から独自の手法を開発している点で評価を集めた菅原直樹氏が選出された。</p>
評論等	<p>評論等部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として21名、文部科学大臣新人賞候補者として15名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、領域横断的な著作が幾つかあったが、文部科学大臣賞は7名(文学1、演劇2、音楽1、美術3)に、文部科学大臣新人賞は8名(美学1、映画1、音楽2、民俗学1、文学1、美術2)に候補者が絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞は、まず長年の歌舞伎研究の集大成である「評伝 鶴屋南北」の古井戸秀夫氏が満場一致で決まった。あと一人の選考は議論となったが、「抽象の力」を書いた岡崎乾二郎氏の造形作家であり評論家でもあるという独自の立場からの発言により、既存の美術評論とは異なる地平を開いてきたことが評価された。文部科学大臣新人賞は、将来性を買うのか、それとも一定の研究成果が示された点を評価するのかが意見が分かれ、議論を交わした。最終的には、幕末から明治の激動期に生きた画家を資料に基づき堅実に見通し、現代における再評価をも論じた「月岡芳年伝」の菅原真弓氏が選ばれた。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として10名、文部科学大臣新人賞候補者として8名の推薦があった。メディア芸術部門は、ICT(情報通信技術)等に基づいて展開される狭義のメディア芸術のほか、漫画、アニメーション、ゲーム・デザイン等、性格の異なる多領域を含む。選考審査員にとって、各自の専門以外については判断が難しく、部門の枠組みの在り方にまで論議が及ぶ場面が再三あった。その中で、口頭説明や各種資料の点検を基に、慎重に質疑、討論を重ねた。第一次選考審査会の結果、領域間のバランス等も考慮し、文部科学大臣賞は5名に、文部科学大臣新人賞は4名に候補者が絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会以降に配布された作品資料等も検討し、更なる審査・選考を進めた。その結果、文部科学大臣賞には、積年継続中の仕事の集大成というばかりでなく可能性豊かな新たなアートシーンを提示する展覧会を演出してみせた荒木飛呂彦氏を、文部科学大臣新人賞には、ニューメディアとプリミティブな身体的感覚を結合させる斬新な表現を行い、高く評価された蓮沼執太氏を、それぞれ選出した。</p>

# 芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日  
文化庁長官裁定  
一部改正 平成11年 5月13日  
一部改正 平成13年 1月 6日  
一部改正 平成15年 4月 1日  
一部改正 平成16年 4月 1日  
一部改正 平成19年 12月26日  
一部改正 平成24年 4月 1日

## 1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

## 2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家，演出家，演技者，舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家，脚本家，撮影者，演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家，指揮者，作曲家，演出家，舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家，演出振付家，舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家，翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家，演出家，演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家，作曲家，演出家，演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家，文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

## 3 賞の対象

- (1) 賞は，文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は，特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので，各部門2名以内（ただし，放送部門，芸術振興部門，メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は，新人の芸術家（個人）を対象とするもので，各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については，原則として対象としない。

## 4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は，毎年，原則として1月中に行うものとし，選考の対象となる業績は，主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては，これまでの業績に加え，将来性，年齢，他の受賞歴等も勘案して選出する。

## 5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い，受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため，各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け，選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門，芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家，専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

# 芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日  
文化庁次長決裁  
一部改正 平成13年 1月 6日  
一部改正 平成15年 4月 1日  
一部改正 平成16年 4月 1日  
一部改正 平成19年12月26日  
一部改正 平成24年 4月 1日

## 1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のこと留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

## 2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
- (2) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
  - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
  - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
  - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

## 3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

平成30年度(第69回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】		【放送部門】	
井上 桂	水戸芸術館 A C M劇場 芸術監督	碓井 広義	上智大学文学部教授
小田 幸子	日本大学芸術学部非常勤講師, 能・狂言研究者	岡室 美奈子	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長, 早稲田大学文学学術院教授
近藤 瑞男	共立女子大学名誉教授	上滝 徹也	評論家, 日本大学名誉教授
出口 逸平	大阪芸術大学教授	鈴木 嘉一	放送評論家
林 尚之	日刊スポーツ新聞社文化社会部編集委員	竹山 洋	脚本家, 小説家, エッセイスト
宮辻 政夫	演劇評論家	藤田 真文	法政大学社会学部教授
渡辺 弘	(公財) 埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長	八木 康夫	テレパック常務取締役, プロデューサー
【映画部門】		【大衆芸能部門】	
明智 恵子	キネマ旬報編集部エグゼクティブ・エディター	大友 浩	演芸研究者, 文筆家
宇田川 幸洋	映画評論家	荻田 清	梅花女子大学名誉教授
岡島 尚志	国立映画アーカイブ館長	小倉 エージ	音楽評論家
古賀 重樹	日本経済新聞社 編集委員	中村 真規	演芸プロデューサー
種田 陽平	美術監督	前田 憲司	芸能史研究者
根岸 吉太郎	映画監督, 東北芸術工科大学長	油井 雅和	毎日新聞記者
平野 共余子	映画史研究者	渡邊 寧久	演芸コラムニスト, 演芸評論家
【音楽部門】		【芸術振興部門】	
岡田 暁生	京都大学教授	新井 鷗子	東京芸術大学特任教授
國土 潤一	音楽評論家	枝川 明敬	東京芸術大学教授
齊藤 裕嗣	東京文化財研究所客員研究員	大友 良英	音楽家
白石 美雪	武蔵野美術大学教授, 音楽評論家	富山 省吾	日本映画大学理事長, 日本アカデミー賞協会事務局長
谷垣内 和子	(公社) 日本芸能実演家団体協議会 実演芸術振興部・企画室長	久野 敦子	(公財) セゾン文化財団常務理事
長木 誠司	東京大学大学院教授	日比野 克彦	東京芸術大学美術学部長, 岐阜県美術館長, アーティスト
野川 美穂子	東京芸術大学講師	吉本 光宏	ニッセイ基礎研究所研究理事
【舞踊部門】		【評論等部門】	
海野 敏	東洋大学教授	今福 龍太	東京外国語大学大学院教授
小野 晋司	(公財) 横浜市芸術文化振興財団チーフプロデューサー, 横浜赤レンガ倉庫1号館館長	河合 祥一郎	東京大学大学院教授
織田 紘二	日本芸術文化振興会顧問	川村 湊	法政大学名誉教授
亀岡 典子	産経新聞大阪本社文化部編集委員	木下 直之	東京大学教授
本多 実男	舞踊家, (公社) 日本パレエ協会常務理事	玉轟 敏子	武蔵野美術大学造形学部教授
丸茂 美恵子	日本大学教授	村山 匡一郎	映画評論家
守山 美花	尚美学園大学非常勤講師	渡辺 裕	東京大学大学院人文社会系研究科教授
【文学部門】		【メディア芸術部門】	
栗木 京子	歌人	飯田 和敏	立命館大学映像学部教授
島田 雅彦	作家, 法政大学国際文学部教授	岡部 あおみ	パリ日本文化会館展示部門アーティスティックディレクター, 美術評論家
野崎 敏	東京大学大学院教授	久保田 晃弘	多摩美術大学教授
平出 隆	多摩美術大学教授	小出 正志	東京造形大学教授
正木 ゆう子	俳人	笹本 純	筑波大学名誉教授
松浦 寿輝	作家, 批評家, 東京大学名誉教授	陣内 利博	武蔵野美術大学教授
三浦 雅士	文芸評論家	吉村 和真	京都精華大学教授
【美術部門】		【部門内五十音順】	
伊東 正伸	国際交流基金ジャポニスム事務局部長, 審議役(美術担当)		
内田 篤真	MOA美術館館長		
小川 敦生	多摩美術大学教授		
片岡 真実	森美術館副館長兼チーフ・キュレーター		
内藤 廣	建築家・東京大学名誉教授		
名兎耶 明	(公財) 五島美術館副館長		
福田 美蘭	画家		
南 雄介	愛知県美術館館長		
森山 明子	武蔵野美術大学教授		
柳原 正樹	独立行政法人国立美術館理事長, 京都国立近代美術館長		

平成30年度(第69回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
網本 尚子	東京富士大学教授	青木 野枝	彫刻家
太田 耕人	京都教育大学副学長	五十嵐 太郎	東北大学工学研究科教授
小田島 恒志	早稲田大学教授	植木 啓子	大阪市新美術館準備室主任学芸員
河内 厚郎	阪急文化財団理事、兵庫県芸術文化センター参与	加藤 泰弘	東京学芸大学教授
古城 十忍	(公社)日本劇団協議会常務理事	唐澤 昌宏	東京国立近代美術館工芸課長
児玉 竜一	早稲田大学教授	黒川 公二	佐倉市立美術館学芸員
祐成 秀樹	読売新聞文化部長	榎木 野衣	美術批評家、多摩美術大学教授
萩尾 瞳	映画、演劇評論家	菅原 教夫	読売新聞東京本社編集委員
濱田 元子	毎日新聞論説委員兼学芸部編集委員	立島 恵	(公財)佐藤国際文化育英財団 佐藤美術館学芸部長
安澤 哲男	世田谷パブリックシアター 劇場部長	中井 康之	国立国際美術館副館長
【映画部門】		中野 嘉之	日本画家、多摩美術大学名誉教授
伊津野 知多	日本映画大学准教授	中村 一美	多摩美術大学教授
尾形 敏朗	映画評論家	花里 麻理	茨城県陶芸美術館首席学芸員
小野寺 修	日本映画・テレビ録音協会理事	藤崎 圭一郎	東京芸術大学教授
掛尾 良夫	城西国際大学メディア学部招聘教授(学部長)	真住 貴子	国立新美術館主任研究員・教育普及室長
近藤 孝	読売新聞東京本社編集局文化部長	森 司	アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長
杉原 永純	山口情報芸術センター キュレーター	光田 由里	D I C川村記念美術館学芸部長
関口 裕子	(株)アヴァンティ・プラス代表取締役	【放送部門】	
暉峻 創三	映画評論家	入江 たのし	メディアプロデューサー
中山 治美	映画ジャーナリスト	音 好宏	上智大学教授
原田 健一	新潟大学教授	佐藤 一彦	立教大学教授
【音楽部門】		里見 繁	関西大学教授
大谷 紀美子	相愛学園学園長	武田 和	(公財)川喜多記念映画文化財団代表理事
薦田 治子	武蔵野音楽大学教授	西村 与志木	JCA西村オフィス代表、フリープロデューサー
塚原 康子	東京芸術大学教授	旗本 浩二	読売新聞編集局文化部長
津上 智実	神戸女学院大学教授	樋口 尚文	映画評論家、映画監督
新美 徳英	作曲家	水田 伸生	日本テレビ放送網株式会社執行役員、制作局専門局長
野平 一郎	東京芸術大学教授	三原 治	放送作家、日本大学芸術学部放送学科非常勤講師
藤田 隆則	京都市立芸術大学教授	【大衆芸能部門】	
堀内 修	音楽評論家	今岡 謙太郎	武蔵野美術大学教授
山田 治生	音楽評論家	太田 博	ジャーナリスト
横原 千史	音楽評論家、兵庫県立大学講師	佐藤 友美	東京かわら版編集長
【舞踊部門】		辻 則彦	フリーライター
阿部 さとみ	日本芸術文化振興会舞踊分野プログラムオフィサー	長井 好弘	読売新聞東京本社編集委員
上野 房子	ダンス評論家	萩原 健太	音楽評論家
楢屋 一之	神奈川県国際文化観光局舞台芸術担当部長兼神奈川県立青少年センター参事	畑 律江	毎日新聞社会学芸部専門編集委員
唐津 絵理	愛知県芸術劇場シニアプロデューサー	古川 綾子	国際日本文化研究センター助教
鈴木 英一	早稲田大学演劇博物館招聘研究員	松尾 美矢子	演芸ライター
松 あつこ	舞踊ジャーナリスト	村井 康司	音楽評論家、尚美学園大学音楽表現学科講師
多々納 みわ子	舞踊家、(公社)日本バレエ協会理事	【メディア芸術部門】	
野崎 益子	(株)日本舞踊社代表取締役	岩下 朋世	相模女子大学准教授
坂東 亜矢子	演劇評論家	遠藤 諭	角川アスキー総合研究所取締役
望月 辰夫	日本芸術文化振興会舞踊分野プログラムオフィサー	門倉 紫麻	マンガライター
【文学部門】		佐藤 雅彦	東京芸術大学教授
安藤 礼二	多摩美術大学美術学部准教授	田坂 博子	東京都写真美術館学芸員
乙川 優三郎	作家	土居 伸彰	(株)ニューディーア代表取締役
恩田 侑布子	俳人	原 久子	大阪電気通信大学総合情報学部教授
城戸 朱理	詩人	東泉 一郎	クリエイティブディレクター・デザイナー
小島 ゆかり	歌人	山村 浩二	アニメーション作家、東京芸術大学教授
佐藤 洋二郎	作家、日本大学芸術学部教授	米光 一成	ゲーム作家
田中 和生	文芸評論家、法政大学教授	【部門内五十音順】	
藤島 秀憲	歌人、エッセイスト		
松永 美穂	早稲田大学教授		
宮内 勝典	小説家		